

あるく・あゆむ

福田 英 敏

1. はじめに

「あるく」と「あゆむ」は、国立国語研究所1964では、ともに「2.339₂足の動作」に分類されている。辞書では二語とも「足を動かして進む」というような解説になっているのが一般的であるが、全く同じ用法がなされるわけではない。場面による使い分けが、ある程度ははっきりしているようであり、また足の動作を表わさない場合にも使われることがある。以下、この二語の意味や用法を考えてみることにしたい。

2. 「あるく」と「あゆむ」の基本的考察

この二語は、ある地点から別な地点への移動を表わしている。しかし、意味や用法については、必ずしも共通するものではない。次の例文について、考えてみよう。

(1) 道を あるく。

(2) 道を あゆむ。

筆者の内省によれば、(1)の「あるく」は、いわゆる歩行運動、すなわち「胴体を足で支えて宙に浮かし、足を動かして前進する動作（森田1977, p. 55）」を表わす。(1)で「道」というのは、交通が行なわれるための道路のことである。ところが(2)では、「道」は「人の生涯、人生」であり、その時間的経過を表わしているのが「あゆむ」であると考えられる。「あるく」が実際の歩行運動を表わすのに対して、「あゆむ」は主として抽象的な移動を表わす。

ところで、この二語をどう意識しているか調査した結果の概要が表である。インフォーマントは、現在東京もしくはその周辺に居住する20歳代前半の方々に、配列は出生地別に北から南、東から西という順である。

話者、性別年齢出生地、及び同地に居住した期間	A 歩行運動		B 抽象的移動		
	あるく	あゆむ	あるく	あゆむ	
北海道	A (f. 21) 網走市, (0~18)	○	?	○	○
	B (m. 21) 札幌市, (0~11)	○	?	??	○
東 北	C (f. 21) 大船市, (0~15)	○	?	??	○
	D (f. 22) 宮城, 登米郡, (0~18)	○	○	?	○
関東	E (m. 20) 飯能市, (0~13)	○	?	×	○
東 京	F (m. 23) 世田谷区 (0~現在)	○	??	?	○
	G (f. 20) 世田谷区 (0~現在)	○	??	×	○
	H (f. 23) 杉並区 (0~現在)	○	×	×	○
	I (m. 22) 豊島区 (0~現在)	○	??	○	○
	J (f. 21) 豊島区 (0~15)	○	?	??	○
	K (m. 22) 相模原市 (0~2半) 以後町田市	○	??	○	○

(補注)

ア. 表中の判定は、次のとおり。

○……不自然でないもの。

?……やや不自然なもの。

??……かなり不自然なもの。

×……全く認められないもの。

イ. 各話者の言語経歴の詳細は後掲。

ウ. この表は、各話者の概括的な見方をまとめたものである。個別具体的な例文に対しては、判定が例外的に異なる場合がでてくるので、これが全てというわけではない。

表より、一般的傾向として、歩く動作に対しては「あるく」が、抽象的な移動に対しては「あゆむ」が使われていることがわかる。反対に、歩く動作に対して「あゆむ」を使えるかというような場合では、人によって程度に差がある。地域差はないようなので、個人による違いとみられる。

分析を進めるにあたり、足の交互運動による移動と、抽象的な移動に分けて、その各々について二語を比較しながら検討していくことにする。

3. 足の交互運動に関する分析

足の交互運動を表わす場合には、通常「あるく」が

用いられる。「あゆむ」を認めるかどうかは人によって様々である。ただ、「あゆむ」を認める人でも、他人の使用は気にならないものの、自ら積極的に使用することは少ないという結果がでている。

3. 1. 動作主について

足を使う運動である以上、足が不可欠となる。たいていが生物であるが、無生物でも人間の形をしたロボットのような場合には使うことができる。また胴体と運動を行なう面とが接しているような生物、たとえばカメラやワニの場合には使えると思われる^(註1)。

- (3) *へビが あるく。
- (4) *へビが あゆむ。
- (5) 人が あるく。
- (6)? 人が あゆむ。
- (7) カメが 水辺を あるく。
- (8) カメが 水辺を あゆむ。

ところで、体に何らかの障害があって歩行が困難な場合でも、次のような言い方をすることができ^(註2)る。

- (9) 足の不自由な人が 車いすで あるく。
- (10)? 足の不自由な人が 車いすで あゆむ。
- (11) 足の不自由な人が 松葉杖で あるく。
- (12)? 足の不自由な人が 松葉杖で あゆむ。

3. 2. 運動の方法、速度

この運動を行なう際に条件となることは、人間の場合では、いずれか一方の足が必ず運動面について体を支え、かつ体を前方に押し出すように力が加わることである。両足が同時に運動面から離れることがあれば、「はしる」や「かける」になるし、前進が伴わなければ「とぶ」や「はねる」が使われる。足を交互に動かしても前進が伴わなければ「あしふみをする」であろう。手をついて、四つんばいになってしまえば「はう」ないし「はってあるく」になる。(「はってあるく」については3.4.を参照。)また次の例のように、足の運動を手で代行するような特殊なものもある。

- (13) さかだちで あるく。
- (14)? さかだちで あゆむ。

なお、犬や猫など四つ足の動物の場合には、観察をしてはいないので詳しい事がわからないが、ふつうに「あるいて」いる時には二本の足で体を支えているものと思われる。

次に、速度については、「はう」よりも速く「はしる」よりは遅いということがまず考えられる。ただし絶対的な基準があるとは思えないので、3.2.の条件に

かなっていれば、どんなに速くてもゆっくりであってもかまわないと思われる。人が普通に歩く時には、分当り100歩から120歩、路離は80メートル前後である。100メートルを越えると急ぎ足であると感じられ、50メートル位になるとゆっくりであると感じられる。

- (15) 急ぎ足で あるく。
- (16)? 急ぎ足で あゆむ。
- (17) ゆっくり あるく。
- (18) ゆっくり あゆむ。

速度を比べると、「あるく」よりも「あゆむ」の方がゆっくりした運動であるとみられる。調査の結果にもこの指摘が多かった。カメラなど動きの遅い動物や赤ん坊の歩行などに使える理由であるようだ。(16)のように速度が速めの時には、容認度はかなり低い。

3. 3. 方向性など

体の前面方向に進行するのが普通であり、また肉体的な構造からみても自然な方法である。「あるく」は直線的であるが、「あゆむ」は幅の広がりというようなものを感じさせる。

- (19) まっすぐ前に向かって あるく。
- (20)? まっすぐ前に向かって あゆむ。

次のように体の前面方向以外の場合や、まっすぐに進まない場合の例も考えられる。

- (21) うしろむきに あるく。
- (22)? うしろむきに あゆむ。
- (23) 酔っぱらって ふらふらと あるく。
- (24)? 酔っぱらって ふらふらと あゆむ。

構文中のヲ格は、動作の行なわれる範囲や地域の広がりを示す。これには、動作の出発点や終点は特に明示されなくてよい。カラ格では出発点が規定されるが、この場合には終点や目的地が〔Sカラ Gマデ あるく〕、〔Sカラ Gへ あるく〕という形で示されることが多い。なおSは出発点を、Gは終点を表わす。

- (25) 公園を あるく。
- (26) 公園を あゆむ。
- (27) 駅へ あるく。
- (28)? 駅へ あゆむ。
- (29) 駅から 大学まで あるく。
- (30)? 駅から 大学まで あゆむ。

動作のおこなわれる場所が具体的に示されたり、区間が規定されたりすると、「あゆむ」の容認可能性はきわめて低いものとなる。

動作の行なわれた時間や距離を表わすときにも「あるく」であり、「あゆむ」は使われないうであろう。

(31) 五時間 あるく。

(32) *五時間 あゆむ。

移動を行なう時の様態が示されているようなものとして、次の例文を出しておく。

(33) 太郎が 花子と あるく。

(34) ?太郎が 花子と あゆむ。

(35) げたを つっかけて あるく。

(36) ?げたを つっかけて あゆむ。

(34)はまず「人生をあゆむ」ことを連想させる。道を歩行する動作を表わすことは、ほとんどないように思われる。^(注3)

3. 4. 場所

起伏の少ない場所でおこなわれる。階段状のところでは用いられず、「のぼる」や「おる」になるはずである。

(37) はしごを のぼる。

(38) 非常階段を おりる。

(39) はしごを あるいて のぼる。

(40) ?はしごを あゆんで のぼる。

(41) エスカレーターに乗らないで あるく。

(42) ?エスカレーターに乗らないで あゆむ。

(39)は「のぼる」という動作の補助的な説明として「あるいて」が使われており、この場合「あるいて」はなくてもよい。(39)では、足を使って実際に移動したのか、乗物に頼ったのか、このいずれかを明らかにするための言い方である。移動の手段が問題になっており、運動の本質が問われているわけではないと考えられるものである。

登山道のように傾斜の強い場所でも「のぼる」等になる。しかし、市街地にある階段状ではない坂道であるとか、特に上下にこだわる必要のない場合、あるいは内容から上下が判断できる場合には、「あるく」が使えると思われる。「あゆむ」の許容度は低であろう。

(43) 柿の木坂を あるく。

(44) ?柿の木坂を あゆむ。

(45) 頂上へ向かって 山道を あるく。

(46) ?頂上へ向かって 山道を あゆむ。

次のような例も考えておくことにしたい。

(47) ?お寺の 石段を あるく。

(48) ?お寺の 石段を あゆむ。

これは、階段の移動に対して上下の言及がなされず、さらに「お寺の」というように条件がつけられているケースである。上下の言及がなくても、この例からは「のぼる」「あがる」を連想するのが、一般的な傾向

といえるようである。(47)はぶらぶらと散歩をしている時などに使いそうな言い方である。(48)は文語的な感じがあるようで、一般的ではない。ここから「お寺の」がなくなると、人によっては容認可能性が変化する。場所が具体的でなくなると「あゆむ」の可能性が高まるというものである。「お寺の」がついていると、お寺の方へ目がいってしまっ、石段に集中できなくなるためであろうと思われる。

4. 抽象的な移動に関する分析

ここでは、時間の経過に伴う進行を扱う。

4. 1. 動作主

一般的には人間であるが、必ずしもそうである必要はなく、ある程度の時間の幅をもつものであればかまわない。擬人法的な扱いをしているものと考えられる。

(49) ?田中氏は 波瀾万丈の人生を あるいた。

(50) 田中氏は 波瀾万丈の人生を あゆんだ。

(51) ?戦後の日本が あるいた 道は 平坦ではなかった。

(52) 戦後の日本が あゆんだ 道は 平坦ではなかった。

(53) ?国民とともに あるく 高潔な政治。

(54) 国民とともに あゆむ 高潔な政治。

このような用法で使用されるのは、主として「あゆむ」である。「あるく」については、「あるいてきた」になると容認しやすくなるようである。^(注4)

4. 2. 場所、方向など

この用法では、動作の行なわれる場所は通常の道路ではなく、人生、生涯、歴史のあるもの、宗教上の道理などに対する時間の経過を表わす用法である。従って、歩行運動の場合とは異なり、動作主のもつ意志性という点でもきわめて制約されたものとなっている。^(注5) 移動ということ自体、きわめて抽象的で、時間の流れに支配されたものである。

ところで次の例は、時間の概念とはやや趣を異にするものである。

(55) (前略)へりくだってあなたの神と共に歩くことではないか。

(56) (前略)へりくだってあなたの神と共に歩むことではないか。

(旧約聖書、ミカ書第6章8節、日本聖書協会1955, p.1290, (55)は「歩む」の部分を「歩く」に改作。(56)が原文通り)

4. 3. 「あるく」を使った例

抽象的な移動を表わすとき、「あゆむ」のかわりに「あるく」が使用されている事例は、本稿執筆時点までに次の例ひとつしか発見していない。

- (57) 「(前略) 僕は誠実に人生を歩いて来たつもりだけど、あのことだけは失敗だった。しかしね、」
と言って、(以下略) (福永武彦『草の花』新潮文庫1956p.36)

インフォーマントに対する調査から、この文はほとんどの話者が抵抗なく受け入れられるものであることがわかった。この理由を質問すると、「誠実に」ということばが入っているために、そちらの方に目が向いてしまっているという返答があった。「誠実に」がないと、半数あまりの話者で可能性が下がっていることから裏付けられるかもしれない。

- (58) ?僕は人生を歩いて来たつもりだけど、(以下略)

5. 複合動詞に関する分析

5. 1. 動詞の連用形+あるく

「あるく」には、他の動詞の連用形について、「いろいろな所で～する」「あちこちまわって～する」という用法があるが、これは「あゆむ」にはないようである。

- (59) 飲み あるく
(60) *飲み あゆむ
(61) 渡り あるく
(62) *渡り あゆむ
(63) ねり あるく
(64) *ねり あゆむ
(65) とび あるく
(66) *とび あゆむ
(67) めぐり あるく
(68) *めぐり あゆむ

足の運動を直接表わすものは少なく、(63)くらいである。

5. 2. 「あるく」「あゆむ」の連用形+他の動詞
次に「あるく」「あゆむ」の連用形に他の動詞がついた場合を考えてみよう。この場合、「あるく」や「あゆむ」と共起できる動詞は意味的に関連を持つことのできるものでなければならぬ。^(註6)

- (69) うろうろと あるきまわる。
(70) ?うろうろと あゆみまわる。
(71) 街燈の下から 人が あるきさった。
(72) 街燈の下から 人が あゆみさった。
(73) ?負傷者のところへ あるきよる。

- (74) 負傷者のところへ あゆみよる。

- (75) ?新しい人生を あるきだす。

- (76) 新しい人生を あゆみだす。

ここでは、「あゆみ+動詞」が足の運動を表しているものもある。ある地点から離れたり、ある地点に接近する移動である。

5. 3. 格助詞の問題

- (77) バスを おりて あるきだす。

- (78) ?バスを おりて あゆみだす。

これに「雨の中を」「雨の中へ」を入れると、それぞれ次のようになる。

- (79) バスを おりて 雨の中を あるきだす。

- (80) バスを おりて 雨の中を あゆみだす。

- (81) バスを おりて 雨の中へ あるきだす。

- (82) バスを おりて 雨の中へ あゆみだす。

筆者の内省では、「雨の中を」(ヲ格)の時には「あるきだす」が、「雨の中へ」(ヘ格)では「あゆみだす」がふさわしいと思われる。動詞に対して格助詞が何かの影響を及ぼしているようであるが、詳細にわたる検討はしない。

6. 名詞形に関する分析

名詞形「あるき」「あゆみ」についてもふれておくことにしたい。

- (83) 山あるきを する。

- (84) この一年の あゆみ。

というような言い方はできても、

- (85) *山あゆみを する。

- (86) *この一年の あるき。

は不可能である。また、

- (87) もしも亀よ 亀さんよ 世界のうちでお前ほど あゆみののろい ものではない……

のように、「あゆみ」を歩行運動に使うことができる。「あるき」がほとんど使用されないために、「あゆみ」の用法が広がっているものと思われる。

7. まとめ

これまでの分析をまとめてみよう。

「あるく」

- i) 胴体を足でさきえながら、足を交互に動かして移動する。その際、足がみな同時に運動面から離れてはならない。
- ii) 複合動詞で「～してまわる」「いろいろな所で～する」を表わす。これは、足による歩行

とは直接関係のないことも示し得る。

「あゆむ」

- i) 歩行を表わす場合、方法は「あるく」に同じ。ただし「あるく」よりは速度がゆっくりで、意志性に乏しい。全般的に文語的なニュアンスを含む。
- ii) 時間の進行に基づく抽象的な移動の概念を示す。
- iii) 複合動詞においては、足による移動も抽象的移動も示し得る。

〔付記〕

調査を行なったのは、S. 55. 10、及びS. 56. 1.である。協力して頂いた方々に感謝いたします。

(注1) ムカデやゲジゲジの類では不可。

(注2) 例文(II)は、実際に足を動かして移動することを示し、その運動を補助するために「松葉杖」が使われる。それに対して(9)では、足を動かすことは要求されず、手で車輪を回したり、後方から押しもらって移動するところにやや問題がある。筆者は不自然であるとは特に感じていないが、人によっては問題の多い箇所であろう。

(注3) 年齢によって「あるく」と「あゆむ」を使い分けている話者S(表1参照)は(3)を認めてい

る。この話者のケースでは、幼児以下では「あゆむ」、それ以上になると「あるく」を使うということである。話者Dでは「恋の道ゆき」など限られた場面にのみ可能である、としている。

(注4) これは「あるいた」と「あるいてきた」の間で、アクセントが異なっているためではないかとも考えられるが、詳細については今後の問題である。その他、話者によっては、動作の主体が人であるかないかで「あるいた」と「あゆんだ」に影響があるとする人もあった。ただし調査ではそこまで扱わなかった。

(注5) 歩行運動では、経路などを決めるのは動作主であるが、人生などはこうしたいと思ってもなかなかうまくいかないことがあり、意志だけではどうにもならない、という意。

(注6) 従って、

(i) *あるき 学ぶ

(ii) *あゆみ 話す

などは不可能である。

言語経歴：1957年9月東京都板橋区生。現在に至る。

(東京都立大学学生)

ける・ふむ

木川行央

1. はじめに

(1) 石を ける。

(2) 石を ふむ。

上の二文を比較するまでもなく、ここにとりあげる「ける」と「ふむ」を類義語とは言い難い。この二語に共通する点といえば、国立国語研究所1964で「あるく」「はしる」などと一つのグループにしてあるその項目どおり、「足の動作」であるという点であろう。また、「足の動作」ではあっても「あるく」や「はしる」などいわゆる移動動詞に含まれる語とは異なり、〈接触〉と何らかの関係をもつであろうと予想されることも共通するといえよう。しかし、〈接触〉との関係の仕方もそれぞれ異なる。本稿においては、「ける」と「ふむ」を比較するのではなく、それぞれ違う語との比較を行い、「足の動作」であるという観点からでは

なく、〈接触〉との関係、ひいては〈接触〉と関係する他の語との関係を考えていく。

2. ける

2. 1.

「ける」を、辞書では、次のように記述している。

- ①足で物をつきとばす。足で突いて前や後ろにとばす。(『日本国語大辞典』)
- ①足でつきやる。足でつきとばす。(『広辞苑第二版補訂版』)
- ①足で突きとばす。(『改訂新潮国語辞典』)
- ①足の先で強く物を突きやる、また、はね飛ばす。(『岩波国語辞典第三版』)
- ①足にはずみをつけるようにして、物を突く(突いて飛ばす)。(『新明解国語辞典第三版』)